

定年退職教授紹介

丸山キヨ子教授と『源氏物語』

伊 藤 虎 丸

東京女子大学日本文学研究会発行の雑誌《日本文学》第 61 号 (1984 年 3 月) は、丸山キヨ子教授退休の記念に捧げられた。その巻末に、日本文学科助手安藤久美子・西村智子両氏の編になる教授の「略年譜・著書論文目録」が掲載されているので、一応のことはそれに譲る。この「目録」を見てすぐに知れることは、教授の御業績の大半が源氏物語に関するものであることである。むろん、お若い時に幸田露伴についての御論文があり、後には宇津保物語の御研究や新渡戸稲造論などの御仕事もあるが、やはり、研究者としての丸山教授は源氏物語ひと筋に打ち込んでこられたというべきだろう。そしてその御業績は大きく二つの方向に分けられる。第一は源氏物語と中国文学 (とくに白氏文集)。第二は源氏物語と仏教。仏教もまた外来思想だとみるなら、両者は共に源氏物語の比較文学的研究とくくることができよう。

二、三年前、必要あってある書店の古書目録をみていたら、丸山教授の『源氏物語と白氏文集』(本学学会刊 学術叢書 3 昭 39) に、たいそうな高い値段がついてびっくりしたことがあった。古書に高い値段がつくような本を書きたいというのは、学者だれしもが抱く夢ではあるまいか。国文の同僚の話でも、これは源氏の比較研究として、当時にあっては先駆的な業績であり、その後多くの研究がなされているとはいえ、今日でもこの面での研究者必見の書であるという。私はこの面が教授の御業績を代表するものと思っていた。

ところが今度「源氏物語と仏数」(《文学・語学》93 号全国大学国語国文学会昭 57) を拝見してみて、教授の主要な御関心が、東北大日本思想史村岡典嗣教授の下で学ばれた時以来、むしろ源氏物語と仏教にあったらしいことを知った。これはこの面の御業績としては講演の形でやや自由に語られたいわば序文のようなもので、本論の方は、『源氏物語の探求』(風間書房) の各輯に所載の御論文などを見るべきだろうし、また法相唯識の思想についての御指摘などは前人にない新しいものとも聞くが、門外漢としては、そういうことより、この御講演に、実ははじめて教授の生まの肉声を聴いたという思いがあり、文学論文である以上当然の事かもしれぬが、日頃慎み深くそういう面をのぞかせられることのなかった教授だけに、ある驚きを覚えたのである。以下、そうした、この講演への素人の感想をのべて、教授の御紹介に代えたい。

たとえば、この講演では、浮舟と横川僧都との三度のかかわりあいを取り上げられている。第一回目、得体の知れぬ、死にそんな女にかかずらうことを避けようとする

弟子たちの言葉を斥けて、浮舟を助け入れる僧都の言動について、教授は女を「仏の救ひ給ふべき際」と言っている僧都の言葉に注目し、「決して自分が救うなどというおおけない言い方をしていない……仏の救われる人であるから自分はその手助けをするのであるという意味がはっきり言い表わされている……救の意志は仏にある……」と解釈される。またこの言葉に、「生命の尊厳」ということが「こんなに確かに、千年前のつくり物語の中に言われている」といわれる。これは横川僧都の（紫式部の）宗教性についての論考だが、また人間存在の基礎をどこに見出したかという、教授自身の信仰の表白ではないか。

第二回目、はかばかしく回復しない女人を救うため、再度、山籠の志を破って下山しようとする僧都の態度と、それが悪い噂の種になり更には「仏法の瑕」になるとして激しく反対する弟子たちの態度とが、対比して論じられる。「僧都の余りにも自在な、捉われない言動に弟子達はついていけなかった」、その人命尊重は「人道主義的に考えてなどというものではない。仏法中心に考えてそうなのである」……。青年時代教授と同じ教会で育てられた私はここに、今日の（ひょっとしたら本学の）キリスト教にも根深くある窮屈なドグマ的な信仰理解（あらゆる主義や組織に必ず表れるもの）に対する抗議をみるのである。

第三回目、僧都は浮舟が薫の思い人であったことを知り、自ら出家させたこの女人に還俗して薫の許に帰るように勧める（と教授は僧都の手紙を解釈する）。これは「大変に勇気のいることである。僧都はこの時も体面よりは……魂の救いの方を重んじた」「その愛執の罪をはるかす（解き放つ）ために自らを犠牲にしている」と教授はいい、これらの僧侶に「聖」すなわち御用僧侶ではない傾向性をみておられる。これらの「捉われぬ自在な」信仰態度とは、実は教授自身のある信仰態度の表明である。むろんこれは仏教をキリスト教的に解釈しようという態度ではない。それはむしろ厳しく慎しんでおられるようにみえる。そうではなく、この講演では「紫の上の内省」の宗教性についても触れられているが、それらを含めて、この背後にはキリスト教に対するある態度、ある信仰理解があるだろうということだ。私はそこに一見堅苦しいまでに慎しみ深くみえた教授の、内面の実は自由な（少くとも自由を求める）肉声を聞いたのである。このような源氏物語の読みの背後には一つの人生がある、と言うよりは、ここには学問と信仰とを通して獲得された一人の女人の確かな人生と人間とがある、と言ったら立ち入りすぎた御無礼になるだろうか。だが人間はどこにでもはない。人間を感じられることは人が人から与えられる最大の喜びではあるまいか。

三月、日本文学科の最後の予餞会で、教授は、学生の前で、昭和八年高等学部入学以来、東北大在学の四年間などを除く四十余年間、「この大学の移り変りを、見るだけは見て来ました」と語られた。決して浅くはない感慨がおありだっただろう。重荷を下された今、どうかいつまでもお健やかに、同窓の先輩としてまた名誉教授として、末永くこの大学を見守り続けて下さることを、心より願い上げたい。